

音楽と私

『桜の頃に』 見松淳子（習志野シニア アンサンブル）

桜が咲き始めた朝の公園で、フルートの音色が聴こえてきた。

私がOLだった20代の頃、通勤途上の事である。姿も見えなかったけれど、澄んだ音色は心に残った。

父はヴァイオリニストだった。幼い頃、私がヴァイオリンを弾く真似をすると、父は大層喜んで、8分の1のヴァイオリンを買って私に教えた。

その頃、ヴァイオリンを習うのは裕福な家の子女が多く、父の生徒にも有名な会社の社長や一流ホテルの副社長の息子がいた。父は若い頃、端正な顔立ちでオシャレでもあったから、生徒の母親のセレブなマダム達には人気があって、食事やコンサートに誘われる事もあり、私も綺麗な洋服を着せられて連れていかれた。そんな父が好きだった。

しかし、成長するに従って、その年代特有の頑固で支配的な父に反発を感じるようになり、思春期の頃には父にヴァイオリンのレッスンを受ける事も、ヴァイオリンを弾く事もすっかり嫌になってしまった。私は「ヴァイオリンをやめる」と宣言した。

父は激怒して、私のヴァイオリンを叩き壊した。そんな修羅場もあったけれど、後悔はしなかった。父との確執はそれから長く続いた。

それでも私の結婚式に、父は「からたちの花」を演奏してくれた。

からたちの花は白いよ 白い白い花が咲いたよ
ウェディングドレスになぞらえた私に対する思いだと分かって胸が熱くなった。

結婚して、子育てが一段落した時、何か音楽をやりたくなった。私にとってヴァイオリンはとっつきやすい楽器であったけれど、今から習うのだから専門家になるわけではないし、未知の楽器がやりたいと思った。

昔、公園で聴いたフルートを思い出した。

「そうだ。フルートをやってみよう」



丁度西武ライオンズが優勝して、船橋の西武デパートが全ての商品をダンピングしていたので、フルートと教則本を買ってきた。

独学で習得しようと思ったが、楽器の構え方からして分からない事が多く、読売文化センターでグループレッスンを受け始めた。先生のアドバイスを、何度やってもうまくいかなかった事がすんなり出来楽しかった。

夫の転勤で大阪に10年間住んだけれど、その間もその後もずっとフルートは私の何よりの楽しみである。

妹が声楽を習っていて、フルートと歌でコラボしようという事になり、実家のレッスン室で、合わせた事があった。父はレッスン室を出たり入ったりして、聴きたいけれど、聴くのも癪という感じだった。

父は晩年、脳梗塞で倒れ、それ以来ヴァイオリンは弾けなくなった。倒れる前日まで練習していたらしく、レッスン室の譜面台には正の字のメモがあった。

父が何度目かの入院で、かなり弱っていた時、妹と一緒に父の病室を訪れた。その時3人で音楽の話をした。初めて父と本当に対等に音楽の話ができたと思った。感慨深かった。

それから2か月後の4月3日、父は89歳の生涯を閉じた。

病室の窓の外は満開の桜が散り始めた。